

近世唐話学における多様性
——「唐話」形成の一つの手がかりとして——

奥村 佳代子

要 旨

江戸时期、岡島冠山编纂了《唐話纂要》《唐話便用》《唐译便览》。所谓唐話就是日本鎖国期间唯一的貿易港長崎的唐通事们使用的話。

当时一些汉学家感到有必要学习口语，因此冠山的《唐話纂要》等受到了欢迎。

《唐話纂要》等书中，口语和书面语混在，可以感到白話小说等的影响。这些书主要部分是一些极普通的内容，但是其中也包含有貿易方面的特殊内容。唐話书籍从词汇和内容上反映了唐通事的语言：唐話的多样性。

—

江戸時代は、周知のとおり鎖国政策が敷かれ、海外貿易が認められていたのは、長崎だけであった。長崎には、来航した中国人（唐人）との貿易上必要不可欠な交渉のため、また、逗留している中国人の生活上の便宜あるいは管理のため、通訳として唐通事が設置されていた。唐通事は、初め、日本に帰化した中国人の職業だったが、後に、職分によっては、日本人唐通事も誕生した。¹⁾「唐話」とは唐通事の話した中国語の呼称である。

1700年代、江戸、京都、大阪で「唐話」学習書が相次いで出版された。『唐話纂要』は最初に出版された「唐話」学習書であるとされる。編著者は、通事経験のある岡島冠山（1674～1728）である。²⁾「唐話」は唐通事にとっては実用の言葉であったが、日本の知識人にとっては学問の対象であった。岡島冠山の登場は唐話学を大きく前進させた。

岡島冠山は、荻生徂徠が中国語学習を推進するために結成した「訳社」で、講師を務めた人物でもある。「訳社」での「唐話」学習は、『水滸伝』や『西遊記』などの白話小説を読んだようである。また、冠山は『水滸伝』に訓点を施した『忠

義水滸傳』を出版している。それが、『水滸伝』が広く日本人の知るところとなるきっかけを作ったのであった。

中国の白話小説は日本の近世文学に新たな一面を生ぜしめたので、白話小説紹介の貢献は大きい。このため、岡島冠山の最大の業績は『水滸伝』訓訳であると考えられた。³⁾たとえば、『水滸伝』訓訳の功績は、支那小説を漢学者及び一般の文学界に手渡した、と高く評価されている。⁴⁾さらに、その「唐話」学習書も『水滸伝』と関係づけられてきた。たとえば、『唐話纂要』は『水滸伝』翻訳のための下準備であった、とする考えである。⁵⁾

たしかに、『水滸伝』の訓訳は、評価に値する仕事である。しかし、冠山の白話小説研究者としての側面ばかりが強調されるあまり、「唐話」学習書である『唐話纂要』でさえ、内容を十分に検討されることなく、あるいは『水滸伝』訓訳の下準備だったのである、と結論づけられ、あるいはテキストとして『水滸伝』などの白話小説を用いた「訳社」での講習会の成果であり、「訳社」のために生み出された一般的な支那語の入門書である、⁶⁾と見なされている。『唐話使用』『唐譯便覧』に至っては、『唐話纂要』と変わったところはない、の一言に止まり、その中味については、詳しく紹介、検討されているとは言えない。

そこで、冠山が関わった主要な「唐話」学習書である『唐話纂要』『唐話使用』『唐譯便覧』には、どのような言葉、あるいは言説が収められているのかを確かめ、近世唐話学の一端を知る手がかりとしたい。

二

『唐話纂要』『唐話使用』『唐譯便覧』の版本と構成及び収録数については、以下の表に示してみたので、それをご覧願いたい。なお、本論文では、『唐話辞書類集』(汲古書院)所収のものを用いる。また、書名はそれぞれ『纂要』『使用』『便覧』と省略する。

版本・構成一覧表

	『纂要』	『使用』	『便覧』
序 文 版 本 な ど	江戸 享保元年序跋 享保元年版(五卷五冊) 享保3年版(六卷六冊) 寛政10年版	京都 外題「唐語使用」 享保10年序 享保20年刊 六卷六冊 明治28年藤懸永治の序を冠し「雅俗清韓通語集巻一」「藤懸永治編輯」とする外題換本がある(未見)。	京都 享保11年序、刊 五卷五冊 巻一から四の途中までは、日本語訳のイロハ順に、対応する唐話が並べられている。
卷一	「二字話」765「三字話」476	「二字話并四字等話」 二字1011 四字337	イロハニホヘトチリヌ 計271
卷二	「四字話」714	「三字并五字等話」 三字674 五字337	ルオ(ママ)ワカヨタ レソツネナラ 計353
卷三	「五字話六字話」 五字話216 六字話216 「常言」138	「六字與七字相連之話」 337*対話形式	ムウノクヤマケフコエ テアサキ 計239
卷四	「長短話」56*対話形式	「初相見説話」12 「平日相会説話」16 「諸般謝人説話」22 「望人看顧説話」6 「諸般借貸説話」10 *対話形式	ユメシシヒモセス 計115 「長短雑話」125
卷五	「親族」114 「器用」432 「畜獸」48 「虫介」110 「禽獸」82 「龍魚」105 「米穀」40 「菜蔬」90 「果蔬」47 「樹竹」67 「花草」100 「船具」87 「数目」1~10 「小曲」 「疋頭」37	「諸般賀人説話」18 「諸般諫勸人説話」19 「諸般讚嘆人説話」24 「書生相会説話」14 *対話形式	「長短雑話」128
卷六	和漢奇談「孫八救人得福」 「徳容行善有報」	「與僧家相会説話」12 *対話形式 「長短雑話」177 「器用」81	
*各巻とも唐話の後にカタカナ或いはカタカナ混じり文の日本語訳がある。			

以上の表に明らかなように、構成ひとつをとってみても、三者がまったく同じというわけではなく、それぞれに個性があると言える。『纂要』は項目別に名称を集めている点、『使用』は場面に応じて交わされる会話を収めている点、『便覧』は日本語訳を基準としている点が、それぞれ他の二冊とは異なっている。よ

って、『纂要』に代表させるのではなく、『使用』『便覧』の中味も同時に見てゆくことは、あながち無意味なことではないだろう。

三

『纂要』には口語的な言葉も文語的な言葉も含まれ、バラエティーに富んでいるといえるが、『使用』と『便覧』についても、同様のことが指摘できよう。ここでは、あらためて、『纂要』『使用』『便覧』の人称代詞、指示代詞、語気助詞を取り上げ、収録されている言葉の多様性について、見てゆきたい。⁷⁾

人称代詞(表1)、指示代詞(表2)、語気助詞(表3)をそれぞれ表に示した。用例を唐話の部分だけを一例ずつ挙げたので参考にさせていただきたい。

人称代詞(収録一覧表1)

		『纂要』	『使用』	『便覧』
一人称	単数	我 我是浅量(二5表) 吾 吾有心腹事 (六5表) 俺 俺乃長崎人氏 (六2裏) *吾、俺は卷六のみ。	我 我也不晓得 (二3裏) 僕 僕初到本地無一眷 属(四18表)	我 我也要買 (一2表)
	複数	我們(一9裏) 我每 今日我每寂寞無 聊(四5裏) 你我 且喜你我一般無 事(四17表) 我和你 不是我和你同 鄉同年骨肉一般 (四12表)	我們 我們講閑話 (二11裏) 我每 我每都鄉下人 (三3裏) 我等 不是我等所能及 (三22裏) 你我 你我都不知 (二12裏) 我和你 我和你是弟兄 一般 (四23表)	我們 我們衆客人 (一19表) 我每 我每都是一般 鄉下人(二6裏) 我等 我等衆家都錢 粮少(二7裏) 你我 你我都是一般 好漢(五11表) 我和你 我和你駕一 隻快船橫在江心里 喫 兩杯如何 (五24裏)
二人称	單数	你 通知你(一16裏) 爾 爾近来学業大進 (四6裏) 汝 我特來煩汝也 (六1裏)	你 你來得太早 (二2表)	你 你幾時回來了 (一3裏)

三人称	複数	你們（一9裏） 你每（一9裏） 你等（一9裏） 爾等 爾等無用恐 （六22表） *卷六のみ。	你們 你們不可爭 （二12表） 你每 你每做甚麼 （二11裏） 你等 你等青年的人 （三19裏）	你們 等候你們 （一16表） 你等 你等做事戴頭露 尾（五10裏） 汝等 汝等皆有職事 （三2裏）
	単数	他 他是海量（二5表） 彼 彼在長崎時濟人貧 困（六21裏） *卷六のみ。	他 他為何怨我 （二10表）	他 他不是個長進的人 休要相與他 （一5表）
疑問	複数	他們（一9裏） 他每（三6裏）	他們 替我請他們來 （三6表）	他們 他們這幾個人都 是我母的親眷 （五16表）
	単数	誰 誰是主告人（三6裏） 阿誰（一9裏） 誰人 誰人出首（二17表） 那個（一9裏） 甚人（一9裏） 何人（一9裏） 什麼人 什麼人併命了 （三5裏）	誰 誰能保無事 （二4裏） 那個 那個能勾常保無 事（六12表） 甚人 看裡首有甚人在 （四20裏） 今日有何喜事請 甚客人 （六14裏）	誰 誰想反蒙下顧 （三10表） 誰人 誰人來了 （二14裏） 那個 會衆那個不說低 （三15表） 甚人 他是你的甚人 （四3裏） 甚麼人 甚麼人聽見 （一12表） 什麼人 什麼人在那裡 （二23表）

* () は、卷数、葉数、表裏を示す。

単数形

「我」「你（爾）」「他」が用いられている。口語の収録が目的ならばこれで十分である。

しかし、『纂要』巻六には文語的な「吾」「汝」「彼」がある。巻六は、後から付け足された巻であり、恐らくは岡島冠山の手による白話文が収録されている。したがって、「吾」「汝」はわざわざ後から付け足されたということになる。日本人による白話文という特殊な部分のみ見えるとはいえ、このように文語的な言葉を収録するということは、語彙が当時の中国本土での口頭語であるかどうか、徹底的に拘るというわけではない編纂者、読者の存在が感じられるのではないだろうか。

また、『便用』には「僕」という書面語さえも見える。

複数形

単数形も単一であるとは言えなかったが、複数形の収録状況を見ると、これといった基準を設けているわけではないことが、より顕著である。少々の違いはあるが、三書とも、定まった言い方として一種類のみを収録しているのではない。

『纂要』『使用』『便覧』ともに「～們」「～毎」「～等」という形で表される複数形を収録している。『纂要』には「我等」はないが、「你等」がある。

太田辰夫(1958:111,347)によると、「～毎」は元代において北方で広く用いられ元代を代表する複数形である。「～們」の們的字は明代になってから用いられ始め、明代を代表する複数形であるという。また、太田辰夫(1988:149)によると、「～等」を複数形として用いるのは古い用法であり、文語的であったという。

つまり、「～毎」「～們」「～等」は、話された時代や用いられた場面が異なるのである。

これらの混在は書物にはよく見られる。だが、少なくとも一個人の話し言葉では、このようにレベルの異なる三種類の言い方が混用されることはないのではないだろうか。この点は注意して良いように思う。

指示代詞(収録一覧表2)

		『纂要』	『使用』	『便覧』
近 称 ・ 人 物	事 物	這 這都是不中用 (三3表)	這 這事(二9裏)	這 這話(二14裏)
		這個 這個田地 (四19表)	這個 這個田地 (三13裏)	這個 這個床上不知誰人 坐(三12表)
		這些 這些後生 (四17裏)	這些 這些事沒要緊 (三14表)	此 保管此件事十日內成 就得來(三6裏)
		此 此少年(六2表)	此 此兒(五3表)	茲 因茲沒可奈何 (三5裏)
		是 是三隻船 (六20裏)	茲 因茲(三11表)	是 是夜刮起東北風 (五12裏)
		之 救之(六1裏)	之 依之(四14表)	之 不可得之(三2裏)
		斯 若斯(六20表)	斯 如斯(三20裏)	焉 以免焉矣哉 (三3表)

	場所	這裡（注8）這裡坐 （一14裏） 這廂 這廂坐 （一17裏） 個裡 在個裡頑耍 （三1表） 此間 流落在此間 （四10裏） 此 迤邐至此 （六3表）	這裡 這裡來 （二11表） 這裏 在這裏多喫三杯 （四7表） 這首 這首坐 （二11表） 個裏 在個裏歇 （六18裏） 此間 遂流落在此間 （六14表） 此 在此一住三年 （三14表）	這裡 我這裡（一12裏） 這裏 在這裏宿一宵 （二19表） 這壁廂 正應在這壁廂 （一19裏） 個裏 在個裏宿一宵 （三11裏） 此間 在此間投宿 （四9表） 此 無故到此（二23裏）
遠称	事物 人物	那 那寒酸秀才們 （四2表） 那些 那些客人 （四8表）	那 那風流美男 （六11裏） 那個 他那個妓女 （六16表） 那些 那些貪官 （三18表）	那 那風狂人（二25表）
	場所	那裡 在那裡飛盃花間 （四6裏） 那廂 那廂坐 （一17裏） 那首 若有經我那首 （四11裏） 彼 足下往彼 （六7表）	那裡 那裡去 （二11表） 那廂 那廂去坐一回罷 （三10表） 那邊 那邊坐 （二11表）	那裡 什麼人在那裡 （二23表） 那裏 在那裏讀書 （二19裏）

*（）は巻数、葉数、表裏を示す。

近称

三書とも「這～」の形が最も多いが、文語的なものも数種類含まれている。

『纂要』の近称の欄に挙げたように、初版の五卷五冊からなる『纂要』は「這～」という口頭語的なものだけだった。文語的な「此」「是」「之」「斯」は、後に付け足された巻六の白話文にのみ見える。先に触れた人称代詞にも同じ傾向があった。このような文語的な言葉の付け足しを促す何らかのきっかけがあったのだろうか。『便用』『便覧』にも、それぞれ数種類の文語的が見える。

また、近い場所を指す「ここ」という意味を持つ言葉として、「這～」とともに「個～」が収録されているが、「個～」は明末清初のころ南方では常用されていたともいわれる。⁹⁾

語氣助詞 (収録一覽表3)

	『纂要』	『便用』	『便覽』
了	多多欠情了 (四4裏)	今朝大冷了 (二2表)	有些疲倦了 (一2裏)
哩	他愛着象碁哩 (三8裏)	他別有大過失哩 (三24表)	不要做怪先生就來哩 (一9表)
罷	家常些罷 (二1裏)	一起回去罷 (二15表)	不在家改日再來罷 (二19表)
罷了	家常些罷了 (二1裏)	將就些罷了 (二6表)	將就些(二3裏) 家常些(二5表)
便了	少叙閑話便了 (四5表)	只好家常些便了 (三8裏)	求他一求便了 (一6裏)
則個	多喫兩盃酒則個 (四8表)	千萬你体悉則個 (三8表)	千萬体悉則個 (一4裏)
哉	安能如此哉 (四10裏)	有何面目処世哉 (三5裏)	苦哉(一9裏)
也	可謂清平世界也 (四1表)	真是英雄之士也 (六9裏)	事到臨頭不可救也 (三3表)
也罷		命不好也罷 (二19裏)	
矣	敢施犬馬之勞矣 (六6表)	事必諧矣 (一11表)	間別久矣 (四21裏)
焉	日後興頭預先可知焉 (四1裏)		天下太平四海雍熙其 樂大焉 (四13表)
乎	獨少美人不亦惜乎 (六16裏)		亦當如此而休乎 (四19表)
耶	此金先人留與足下耶 (六8表)		
耳	恐不足為對耳 (四15裏)		我實效之耳 (三19表)
而已	翁聞嗟嘆而已 (六19裏)	小弟如此而已 (五20表)	
麼	誰是被告人麼 (三6裏)	康健麼 (六2表)	你曉得麼 (一15表)
呢			早路去呢船路去呢 (一23表)
着		且耐心等着 (二12表)	
沒有			曾睡了沒有 (二21表)
不曾		曾許了人家不曾 (六16裏)	曾明白了不曾 (二24裏)
否	打双六耍子否 (三9裏)	未審興居如意否 (三1表)	

* () は巻数、葉数、表裏を示す。**用例がないものは空欄とした。

若干の違いはあるものの、三書とも俗語的な「了」「哩」「罷」「罷了」「便了」「則個」「麼」があると同時に、文語的な「也」「矣」「焉」「乎」などもある。疑

問を示す「呢」が『便覧』にのみある、という点は、あるいは偶然ではないのかもしれないが、一つ一つの言葉の有無については今後の課題としたい。

以上のように、一例ずつしか挙げなかったが、『纂要』『使用』『便覧』の言葉が、どのような中国語であるかを見るために、人称代詞、指示代詞、語気助詞を取り上げた。少々の違いはあるものの、三者とも、これといった基準を設けているとは言えない、と考えるのが妥当だろう。一種類の定まった語彙だけを収録するのではなく、いわゆる口頭語、俗語、文語、書面語などを、無差別に集めたように見える。

また、程度の甚だしさを表す言葉として「～得緊」と「～得狠」がみえる。より新しい表記である「很」という文字は使われていない。太田辰夫（1988:168）によると、「～得很」は元明代では稀にしか見られず、清代になってよく用いられるようになったという。

程度の甚だしさを表す「～得緊」と「～得狠」

	～得緊	～得狠
纂要	縛～（一16表）熱～（一16裏）冷～（一16裏） 敵～（一16裏）涼～（一23表）有趣～（二1裏） 匆忙～（二1裏）喧嚷～（二4表）痒～了（二9裏）	涼～（一23表）
使用	可笑～（一2表）熱～（二5表）冷～（二5表） 風騷～（一3表）忙～（二1裏）好～（二2表） 苦～（二5表）称赞～（五26裏）好怕～（六16表） 委實厭他～（六10裏）可恨～（六13表） 熱鬧～（六18裏）濟楚～（六22裏）	罵～（二20裏） 肉麻～（六16表） 苦～（六17裏）
便覧	捏～（一10表）委實好看～（一10裏）可恨～（一13表） 真正多謝～（一15表）好咲～（二5裏）好像～（二5裏） 好怕～（二7表）自忙～（二11表）委實冷淡～（二14裏） 乾淨～（二15裏）多謝～（二19裏）好～（三9表） 可憐～（三11表）眼熱～了（三15裏）爽快～（三17表） 渴想～（三18裏）干係～（三22裏）醜醜～（三24表） 古怪～（四2裏）可惜～（四6裏）好～（四11表） 多～（四19裏）歡喜～（五2表）可惡～（五5表） 勞你～（五16裏）委實不當～（五18表） 可恨～（五24表）好生興旺～（五6裏） 好生快當～（五12裏）	可惡～（一9裏） 可惜～（二3表） 熱鬧～（三9表） 悔氣～（五20裏）

*（）は、巻数、葉数、表裏を示す。

これらの例が示すように、この日本語にはこれ、という一対一の関係ではなく、同じ意味を持つ語が複数収録されていることがわかる。しかも、文語とされる語彙と白話とされる語彙とが混在している。さらに、白話語彙のなかでも、口頭語としてより新しいものと古いものとが混在している。

このように、さまざまなレベルの語彙が混在している、ということが、『唐話纂要』『唐話使用』『唐譯便覧』の大きな特徴であるといえる。これは、当時中国本土で話されていた中国語をそのままの形で完璧にマスターする、ということには適さない特徴である。

しかし、古い経書だけでなく、明律など同時代の書物をも読み解こうとしていた日本の漢学者にとっては、異なる言語レベルで書かれた書物に対応できるという条件を、謀らずも少なからず満たしていたのではないだろうか。

四

前章で見たような文語語彙と白話語彙との混在は、単純に考えるならば、実際に耳にし口にした言葉と、さまざまな書物から寄せ集めた言葉とを一緒に並べているからである、と言えよう。

『纂要』『使用』『便覧』には出典が明示されていない。岡島冠山が『水滸伝』に訓点を施した人物であるということで、『纂要』の言葉と『水滸伝』の語彙とが関連づけて論じられたことがある。しかし、その調査の対象となったのは、「喫飯」「請坐」など、日常的な二字の言葉であり、特に『水滸伝』でなくても使用される言葉である。¹⁰⁾『水滸伝』に限らず、その他多くの白話小説の語彙と重複するのは、ごく当然のことと言えよう。

むしろ、出典を明示しなかったこと、そして、出典を限定することのできない内容の多様性に注目すべきではないだろうか。たとえ、書物や書かれたものから採った言葉であったとしても、「特定の書物を読むために出版された辞書」ではなかったから、ある特定の書物の言葉であることを意識する必要はなかったのだろう。

そこで、出処はどこか、という点については捕らわれずに、『纂要』『使用』『便覧』の中味が、どのような事柄に関するものであったかを、具体的に見てゆこう。

その1 内容から見る普遍性

『纂要』『便用』『便覧』には、日常生活において、誰もが使う言葉や、遣り取りが決して少なくない。一部を次に例示する。初めに唐話、次に原文に基づき、その訳を挙げる。()は巻数、葉数、表裏を示す。

『唐話纂要』

打掃 抄^テ (一12裏) 到那裡去 ト^ニ行^カ。(二5裏)

今日天色好 今日^ニ好^シ。(三1表)

你今日有什麼事故麼。若没事の時節。我要留你一日喫酒頑耍。未知你意下如何

汝今日ハ用事アリ。若用事ナシ。汝^ヲ一日留テ酒ヲ^ニミツカ^フ。汝^ノ心入^ル如何。(四7表a)

我今日可可有件事。不敢從命了。請免請免

我今日ニ^キリ用事アリ。仰^セニ^シカ^キカ^シ。御免^ヲ蒙^ル。(四7表b)

『唐話便用』

休息 ヤム (一20裏) 久仰高名 久^シ高名^ヲア^ラカ^ク。(一10裏)

要告辭 オト^マツタイ (二1表) 今日那裡去 今日^ハト^ニ行^キ候^ヲ。(二1裏)

何必只管生受 何^ニタ^ラセ^ハカ^ヤ (三8裏)

只好家常些便了 只^ツネ^トリ^テヨ^ク候^ヲ (三8裏)

這幾日少會。未知尊體康健。小弟也俗務多。不能常來問候。得罪得罪

コ^ノ日^ハ。御目^ニカ^ラス。御康健^ニ候^ヲ。某^モ俗務多^ク。切々^ニ申^ス能^ハス。罪^ヲ得^ル候^ヲ。

(四4裏)

答豈敢好說。小弟前日特拜尊府。因值兄長他出。與老管家說聲回來。今日稍得閑暇。偶然到個裏。恰好與兄長會聚。且喜興居平安。大慰積悃

コ^ノ日^ハ。カ^カキ^テ仰^セラ^ル。某^ノ先^ニ貴宅^ニ申^シ候^ハモ。御他行^ノ節^ニ参^リ合^セ。托^テタ^テニ申^シ行^回り候^ヲ。今日^ハ少^シマ^リ得^ル。ガ^コモ^トニ参^リ。チャ^ウト^ヨ。チ^テア^イ申^シ候^ヲ。先^ニ御平安^ニ悦^ビ入^リテ思^ヒ慰^メ候^ヲ。(四4裏)

『唐譯便覧』

越更壯健欽羨欽羨 何^レヨ^クツツヤ^ニテ。ウ^ラヤ^マシ^ク候 (一1裏)

若不在家與家裡人說一聲就是了 ル^シラ^カ。家^来ニ云^ハカ^クヨ^イ (二1裏)

你若用麥飯明晚請你 ム^キメ^シマ^イラ^ハ。明^晚ル^レ申^サ (三2表)

このように、日常的で普遍的な内容の言葉に紛れて、貿易用語が収録されている。貿易用語は、当時の日本にあっては長崎でのみ見られた特殊な環境に関係する言葉であった。

『必備』は、長崎での交易の実際の遣り取りを、通事言葉で知ることのできる資料として貴重だと思われる。『必備』に記録された、唐人貿易の段取りを表す語が、『纂要』『便覧』『便覧』に、どのように反映されているか、見てみたい。

1 起貨（荷揚げ） 『必備』「本船起貨」

你的船貨也多.所以船尾兩邊起細貨.水仙門起粗貨.你看左首的水仙門傍邊灶也砌在那裡.弓蓬也搭在那裡碍了.不便起貨 （75頁）

『便覧』 起貨未完.所以不許船中人上崖 ニモツ。アゲシマハニ因テ。船中ノ人ヲ。オヒアケヌ

（一10表）

2 清貨（荷物を検める） 『必備』「清庫 又曰清貨」

開了庫門.貨都搬出來. 你們到庫去清貨 （100頁）

『纂要』 明日清貨 明日荷物ヲアタメ （二15裏）

3 講價（取引価格決定） 『必備』「講價」

叫出幾艘的船主來講價 （135頁）

『纂要』 講價錢 子クソ云フ （一23裏）

『便覧』 明日與你講價 明日ハ汝ト。子クミセン （三10裏）

4 秤貨（荷物の測量） 『必備』「出貨 交貨 秤貨」

老爹.今日秤貨的大秤不准的 （164頁）

『便覧』

清貨完了還要~~看貨~~看貨完了還要~~講價~~講價完了還要~~秤貨~~秤貨完了還要打點收買回頭貨哩

ニクアリシマツカラハ。テホ見セ。テホ見セヲシマツカラハ。子クミ。子クミヲシマツカラハ。ニワタシ。ニワタシヲシマツカラハ。回リニモツ買ヲヨイヲル （一11表）

1～4の番号を付けた言葉は、唐人貿易での段取りを表す言葉で、『必備』に

は、項目名として挙げられている。特に「起貨」「清貨」「講價」は日本への輸出品として中国から運ばれた荷物の荷揚げ、荷物検査、価格決定という、貿易の主要な手続きである。また、4で挙げた『便覧』の内容は、貿易の手順と一致している。

これらは明らかに貿易専門用語であり、特殊な言葉である。

その3 内包された特殊性

4の『便覧』からの引用にある「看貨」の訳に「テホン見セ」とある。『必備』「出貨 交貨 秤貨」によると、正式に価格の交渉をする前に、商品のサンプルを見せたようである。

這箇花樣太大.大花樣是東洋不合式.商人看過的樣子也沒有這箇花樣.這那里曉得.看疋頭拿了樣子給他看過.花樣大不大是在他的事體 (154頁)

これによると、サンプルすなわち見本という意味の言葉として「様子」を用いている。さて、『纂要』に「様子」という言葉があり、「テホン」と訳されている。

様子 テホン (一13裏) 爲様 テホンニ列 (一13裏)

『纂要』には、「様子」は単独で収録されている。「様子」自体は普遍的な言葉である。一般的には真っ先に「格好」「様子」といった意味が思い浮かぶのではないだろうか。用いる場面を特に限定することは出来ない言葉である。

しかし、ごく平凡な普通の言葉である「様子」も、『纂要』にあつては、貿易用語として用いられた特殊な言葉なのであった。

このように表面的には平凡で普遍的な言葉でありながら、特殊な意味をも内包している言葉をもう少し拾ってみよう。

[粗貨 細貨]

『必備』「本船起貨」 你的船貨也多.所以船尾兩邊起細貨.水仙門起粗貨 (75頁)

『纂要』 粗貨極多 アラノ多シ (二6表) 細貨也有 コマノ列 (二6表)

『便用』 我船上銀頭少.不過有幾樣粗貨. 我舟ハネカクサシイヨノ.アラノ列ニ

(三10裏)

貨物自有粗細.等我備細開出來 ニモツル。アラモモ。コマモノアル。我が イ仁カキタスマテ
(三10裏)

[記號]

『必備』「本船起貨」 在上面有記號的好認.沒有字號的認不出來 (75~76頁)

「貨庫」 但是這箇是衆人的小貨.一起亂放在箱子裡.明日不好認出來.晚生
要記記號 (94頁)

『纂要』 記號 シシツクル (一13表) 必要記號 必スシシツクル (二16裏)

『使用』 記號 シシツクル (一2裏)

[船上頭目]

『必備』「貨庫」 剛纔船上頭目寫信來通知這裡的頭目說.本船的貨起到五六分.還
有四五分的貨不會起 (98頁)

『纂要』 船上頭目 船中ノ役人 (二16裏)

[漂洋過海]

『必備』「本船起貨」 你也漂洋過海來的人 (82頁)

「講價」 他若有良心看晚生飄洋過海來的人.他也留些好意 (141頁)

『纂要』 漂洋過海 洋中ヲヘキル (二3表)

[酩酊的價]

『必備』「看包頭 講包頭 秤包頭 裝包頭 秤添退包頭雜包」酩酊的價 (206頁)

『纂要』 酩酊價錢 ツマリ子ガン (二16表)

ここに挙げた語は、『纂要』や『使用』では、前後の文脈は省略され短く区切られて並べられている。どのような場面での言葉なのかは明らかにされてはおらず、一見理解困難である。しかし、上に示したように、『必備』によると、貿易や貿易に携わる人々と深く関わる言葉であった。このことから、岡島冠山が通事経験から得た知識を『纂要』と『使用』に具体的に示していることがわかる。

五

以上、『譯家必備』と比較することによって、『纂要』『使用』『便覧』に、長崎通事ならではの貿易に関係する言葉が含まれることを確認した。

岡島冠山の唐通事としての経験を考慮すると、貿易に関する言葉が含まれるの

は当然のことである。冠山の中国語のベースが、分かり易い形で顕れているといえよう。

『纂要』巻五に船の部品名を集めた「船具」という項目があるのも、冠山の中国語のベースが、唐通事の言葉であることを物語っているといえよう。そこに挙げられた部品名は、貿易のために来航した唐船の部品名と一致している。また、船の乗組員を指す名称が収録されているが、それは唐船の乗組員を表す名称と一致している。¹³⁾

船の部品名や乗組員の名称は、唐通事としての特別な知識に基づいた言葉であるといえるだろう。その他、船に関する言葉には、次のようなものがある。

『唐話纂要』

我要搭船 我^レンソカ^レシイ (二3裏) 過船到此 ビンソイタ^レシ茲ニ至^レリ (二3裏)
 拋個大錨 大イカ^レ打^レタ (二3裏) 會得搖櫓 ヨ^レワ^レス (二10表)
 會得 船 ヨ^レ舟ヲカクカ (二10表) 我船明日開 我舟^ハ明日出^ス (三4表) 你
 船何日開江 汝^ノ舟^ハ何^レ日^ニ出^スヤ (三4表)
 船上人 死 船中^ノ人^ハ死^ス (三7表)
 把船點上點下 舟ヲ^リ上^ケリ下^ス (三7表)

『唐話使用』

暈船 舟ニ^テヨ (一16表) 纜船 舟ヲ^ツク^ク (一20表)
 趕船的人多 舟ニ^リテ^カ多^イ (二14表) 搭船去 ビンソ^シテ^ク (二20表)
 過船來 ビンソ^シテ^キ (二20表) 附船回 ビンソ^シテ^カル (二20表)
 上了船 フ^レノ^ツク (二20表) 下了船 フ^レヨ^リヲ^リク (二20表)
 放了船 フ^レツ^クク (二20表)
 這船何處發 此舟^ハト^コヨ^リ出^シル^ヤ (二20表)

『唐譯便覽』

風大未可開船 船^ガ大^キイ。マ^ダ舟^ガ出^サズ (二10裏)
 風順了好開船 船^ガヨ^クナ^ツク。舟ヲ^リ出^スヘ^シ (二10裏)
 浪高風大把船點上點下幾乎翻了 ナ^ニ高^ク。風大^ニシ^テ。舟ヲ^リ上^ケ。上^リ下^ケ。既^ニヒ^カヘ^サ
 ント^シル (二21裏)

把船望上水咿咿啞啞。只顧搖將過去 舟ヲ河上ニムケテ。キチキト。トタスニ。オテシク。

（四15表）

趕船的客人多 ハテノ客が多イ（四15裏）

解了纜把船撐開去了 ツイタ。ツキト行。舟ヲサテ出去ヌ（四18表）

江戸時代の主要な交通手段といえば船である。これらは長崎に限られた話題であるとは言えない。一般的で普遍的な内容である、と考えることも可能である。

ここで今一度、『纂要』巻三の「開江」という言葉を取り上げたい。

你船何日開江 汝ノ舟ハ何ノ日出ヌ

ここでの「開江」は船が出る、すなわち出航するという意味で使われている。

中国語の「開江」は川を押し開くように前進してゆくという意味で、『水滸伝』にも使われている。たとえば、

晁蓋整點衆人完備，都叫分頭下船，開江便走（『水滸伝』第四十一回）¹⁴⁾

「開江」の「江」は、もちろん大きな川ということであり、長江を指すことが多い。しかし、『纂要』の「開江」が、冠山が長崎で実際に耳にし、口にしていた言葉であったならば、「江」は何を指すだろうか。

『長崎名勝圖絵』に、長崎の地形について、次のような記述がある。

長崎は江濱の地にしてその江を深津江といふ乃鎮の右にありこれを呼で深津江といふ相傳ふ古へ江水氾濫して西北深く瓊杵山及び三丘の下に達す又引て東す…（中略）江極めて深うして潮の消長すといへども甚舟楫に便なり但北風なれば上るに利あらず南風は則下るに利あらず舟人これに由て候とす東は酒屋町川筋より西は尾上の水邊にいたり南は女神男神神崎に至るこれを港内といふ…（中略）又池嶋あり嶋のなかば池を爲す其池極めて深碧なり西南の方は渺茫として水天一色なり外國船の入貢これによりて路を取る平戸五島は其西北にあたり¹⁵⁾

これによると、「江」とはすなわち入り江のことである。長崎の人々は、外国

船の出入りしていた港である入り江を、深津江と呼んでいたという。

さて、『便覧』にも、次のような例がある。

你此船從何處開江.爲甚無故到此.莫非在洋中遇着大風漂流而來.我邦有法.要預先問明白.然後好與你做主. 你們必須從實招說

汝が此舟ハ.何レ処ヨ出シカレ。何トシテ又故ナケ。此処ニ至ル。但シ洋中ニテ大風ニ遇ヒ。漂流シテ來ルカ。我邦法アリ。預メ分明ニ問テ。其後汝共カ為メ。リヤケンヲ致スナリ。汝等委細マツクニ申セ。(二23裏)

看定了天氣.方纔開船.萬無一失.不然胡亂開江.在江外遇着風波時.進退兩難.又没有泊船的所在.江外那一帶礁兒好生利害.若有船一觸他時.無不破壞. 你初到這裏.恐還不曉得江外的艱難.我因特地奉告

ヒヨリ見定テ.舟ヲ出サカ。万ニ一ツモ。アヤリアルマシ。然ラスシ。乱ラニ出帆シ。江外ニ於テ。風波ニ遇ル。進ニモ。退ケニモ。両カウ佃シ。殊ニ又舟ヲカカヘキ処ナシ。江外彼一連リノ礁。甚タ候ハ。定テ江外ノカナンヲ。知り玉フマシ。故ニ我コレヲ告知セ候フ。(四10表)

此江直至大洋.又是通着多少去處.商舶來往絡繹不絕.真個興頭哩

此江ハ直ニ大海ニイカリ。又方々ニ通シ。商船ノ往來打ツツ。行絶ルトナシ。誠ニハシヤウナリ。

(五24裏)

ここに描かれている「江」の様子は、長崎の深津江の様子と一致する。

「江」は河ではなく入り江のことである。ここでの「此江」とは深津江であり、深津江の様子を「唐話」で表現したものではないだろうか。

中国語の「江」の意味を今一度、代表的な辞書(『漢語大詞典』)で確認してみる。

江 ①专指长江 ②江河的通称 ③周代的国名 ④姓 (第5卷915頁)

中国語の「江」は、主に長江、あるいは大きな河を指す。

また、上の『便覧』の例では、「江外」という語が何ヵ所か出てくるが、どれも入り江の外に広がる海を指し、『漢語大詞典』(第5卷917頁)にあるような「江南」ではありえない。

中国語の「江」には入り江という意味はなく、日本語固有の用法であるということが分かる。したがって、『纂要』や『便覧』に用いられている「江」が入り

江を指しているのは、正統の中国語であるかどうかという観点から見ると、確かに誤った用法だろう。

しかし、「開江」と言ってしまうと、形のうえからは紛れもない中国語である。長崎ならではの用法として、通事や唐人を取り巻く人々の間で実際に話されていた可能性が、非常に高い。長崎に住む通事が、入り江を出る、すなわち出航する、というつもりで「開江」と言ったのを、唐人は、川を進んで行く、から連想して、同じく、出航するの意味にとったのであろう。もし、そのように推測することが可能ならば、相互の誤解の上に理解が成り立っていたのだろう。

こうしてみると、長崎に渡来して以来、一度も中国に帰ることを許されなかった唐通事の間で、一種のお家芸のように継承されていった言葉が、本来の中国語を離れ、長崎という狭い世界でのみ使用された「唐話」へと姿を変えた、と考えられるだろう。そうであるならば、『纂要』『便覧』における「江」の用法も、「唐話」の一側面——正統の中国語から日本化した中国語へ——を物語る証左であるといえよう。¹⁶⁾

六

岡島冠山の唐話学とは、どのような言葉を対象とした学問であったのかを知る一つの手がかりとして、1 多様性、2 普遍性、3 特殊性という3点から、『唐話纂要』『唐話使用』『唐譯便覧』の言葉を検討してみた。

岡島冠山の中国語知識のベースである「唐話」が唐通事の言葉であること、及び『纂要』『使用』『便覧』に「唐話」がどのように反映されているか、その一端を知ることができたのではないかと思う。

先にも触れたように、『纂要』『使用』『便覧』の特徴の一つは多様性と普遍性という点である。この点から見ると冠山が長崎で実際に耳にし口にした言葉であるとも書物から採録した言葉であるとも言いきれない言葉が大多数を占めている。

しかし、一見普遍的であっても、貿易用語としての特殊性を内包している言葉も存在する。通事言葉は普遍的な内容や語句にも反映されているのである。さらに、「江」の用法には「日本化」が見られた。これは、「唐話」の姿を忠実に再現している、と言えるのではなかろうか。

岡島冠山という長崎通事の端くれであった人物が関わっているのである。白話

小説から採った語ではなく、通事実際に話した言葉の占める割合が高いことは自然なことであり、『纂要』『使用』『便覧』の多様性も、通事の言葉「唐話」の持つ多様性を反映していると言えるのではないだろうか。

注

- 1) 林陸朗(2000)などによると、唐通事は、多くは日本に帰化した中国商人や亡命華人の子孫が世襲した。その役職には大通事、小通事、唐通事目付、唐年行司、稽古通事などがあった。稽古通事は、大通事、小通事の補佐役で、その子弟でなければ任官することができなかった。このように、通事職は先祖代々受け継いでゆくべきものであり、他者が割り込むことのできる世界ではなかった。
内通事は、唐人の世話や雑事一般の通訳で、日本人でもなることができた。
- 2) 岡島冠山の伝記については、不明な点が多々残っている。通事経験については『唐通事會所日録三』の元禄十四年(1701)三月七日の記録に南京内通事の岡島長佐衛門(冠山の別名)が辞職願いを提出し、同八日の記録に受理された、とあることから、1701年以前に内通事であったことがわかる。
- 3) 岡島冠山が『水滸伝』に訓点を施したことは、確かである。江戸時代には、『水滸伝』の翻訳も出版された。翻訳者は岡島冠山であるともされるが、誰であるかは、まだ特定されていない。植田渥雄(1994:119-131頁)などでは、岡島冠山が何らかのかたちで関係したことを肯定しながらも、翻訳者としては疑問が示されている。
- 4) 青木正児(1927)及び青木正児(1932)による。
- 5) 潟沼誠二(1984)による。
- 6) 石崎又造(1940)による。
- 7) 『唐話纂要』の人称代詞、指示代詞、語気助詞については、奥村(1997:104-113)で触れたことがある。
- 8) 『纂要』では、ころもへんではなく、しめすへんである。
- 9) 香坂順一(1983:462)による。
- 10) 奥村(1996:99-113)で、潟沼誠二(1984)で提示された『唐話纂要』と『水滸伝』の語彙調査に関して触れた。
- 11) 奥村(1997:104-113)でも触れたが、日本語訳の「カウセン」「代物」「入札」「三ケー」は、貿易用語として使われていた言葉である。「カウセン」(口銭)は輸出入の仲介によって得られる利益のこと、「代物」は密貿易を防ぐため、幕府が認めた公式の貿易以外の物々交換のこと、「入札」は唐船で運ばれた貨物を商人に売り捌く前に行う手続き、「三ケー」は特定の唐人受け入れ宿が仲介料を独占するのを防ぐための制度のことであり、貿易専門用語と見なして良いだろう。
- 12) 『唐話辞書類集』第二十卷所収のものを用いる。長沢規矩也氏の解題によると、『譯家必備』は長崎の通事の為に清商との対話を項目毎に録したものである。
- 13) 奥村(1997:104-113)で触れた。

- 14) 『水滸詞典』「开江」(245頁)にも同じ例を挙げている。
- 15) 『長崎名勝圖繪』は、饒田喩義が文化年間(1804~1817)に執筆したものを丹羽漢吉が整理し、1931年に出版された。
- 16) 木津祐子2000a及び木津祐子2000bでは「唐話」を「周縁中国語」「境界における中国語」としている。

参考文献

単行本

- 林陸朗2000『長崎唐通事—大通事林道榮とその周辺—』東京：吉川弘文館
- 山脇梯二郎1964『長崎の唐人貿易』東京：吉川弘文館
- 東京大学1960大日本近世史料『唐通事會所日録三』東京：東京大学出版会
- 青木正児1927『支那文藝論叢』東京：弘文堂（『青木正児全集』第二巻所収）
- 青木正児1932『支那文學藝術考』東京：弘文堂書房（『青木正児全集』第二巻所収）
- 瀧沼誠二1984『儒学と国学—「正統」と「異端」との生成史的考察』東京：桜楓社
- 石崎又造1940『近世日本に於ける支那俗語文學史』東京：清水弘文堂書房
- 太田辰夫1958『中国語歴史文法』東京：江南書院
- 太田辰夫1988『中国語史通考』東京：白帝社
- 香坂順一1983『白話語彙の研究』東京：光生館
- 丹羽漢吉1931『長崎名勝圖繪』（饒田喩義編述 打橋竹雲画）長崎：長崎史談会

論文

- 呂叔湘1949「説「們」」『國文月刊』第七十九期1-9頁（1955『漢語語法論文集』北京：科学出版社145-168頁）
- 植田渥雄1994「岡嶋冠山編譯『通俗忠義水滸傳』考」『櫻美林大學中國文學論叢』第十九號119-131頁
- 白木直也1958「俗忠義水滸傳の編訳者は誰か」『広島大学文学部紀要』第13号204-231頁
- 木津祐子2000a「唐通事の心得—ことばの伝承」『興膳教授退官記念中国文学論集』（汲古書院）653-672頁
- 木津祐子2000b「『唐通事心得』訳注稿」『京都大學文學部研究紀要』第39号1-50頁
- 奥村佳代子1996「岡嶋冠山『唐話纂要』考」『關西大學中國文學會紀要』第17號99-113頁
- 奥村佳代子1997「『唐話纂要』編纂の意図—語彙にみられる特徴より—」『中国語学』第244号104-113頁